

坂本龍一選 耳の記憶 後編

選曲・執筆 坂本 龍一
 撮影 田島 一成
 インタビュー・文 後藤 繁雄
 編集 谷口 恭子(婦人画報編集部)

クリエイティブ・ディレクター 空里香

アートディレクション&デザイン 平林 奈緒美

マスタリング・エンジニア 小盛 徹 (JVC マスタリングセンター代官山スタジオ)

出典 ハースト婦人画報社「婦人画報」
 2013年5月号～2014年10月号、2017年11月号～2018年4月号
 までの連載「坂本龍一・耳の記憶」より

協力 株式会社ハースト婦人画報社 婦人画報編集部

commons 若泉 久央
 信太 俊樹
 加藤 亜希子
 湯田 麻衣
 油井 誠志
 川毛 美津希
 吉村 真理奈

ゼネラル・プロデューサー 林 真司
 エグゼクティブ・プロデューサー 松浦 勝人 黒岩 克己

SPECIAL THANKS TO 株式会社キングインターナショナル
 佐藤 直人 佐藤 真吾 山口 苑子
 株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ
 古澤 隆介
 株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント
 小林 将一 渡邊 直子
 ナクソス・ジャパン株式会社
 本田 裕子
 日本コロムビア株式会社
 岡野 博行 田代 麻友
 ユニバーサル ミュージック合同会社
 阿部 香 浦田 功
 株式会社ワーナーミュージック・ジャパン
 鈴木 則孝・川村 純子

AEI
 佐藤 真琴 田口 裕子 柘野 絵里子 居原 あき子 小林 壮太
 AMP
 橋本 幸子

【取り扱い上のご注意】○ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。○ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。○ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。○ひび割れや変形、又は録音帯等で損傷したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。【保管上のご注意】○直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。○ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。

1

イゴール・ストラヴィンスキー
春の祭典から第一部 大地礼讃 1. 序奏
ゾフォ (ピアノ)

Igor Stravinsky: Le Sacre
du Printemps, Première
Partie: L'Adoration de La
Terre: Introduction
ZOFO (piano)
©Boosey & Hawkes
©2012 Sono Luminus
Licensed by Sono
Luminus

2

クロード・ドビュッシー
交響詩 海から第一曲 夜の夜明けから真昼まで
ビエール・ブーレーズ指揮
ニュー・フィルハーモニー管弦楽団

Claude Debussy: La Mer I.
De l'aube à midi sur la mer
New Philharmonia
Orchestra
Pierre Boulez (conductor)
Recording: December
19-21, 1966, Barking
Town Hall, London
Producer: Thomas Z.
Shepard
Recording Engineers:
Hellmuth Kolbe & John
Guerriero
©1968 Sony Music
Entertainment
Licensed by Sony Music
Entertainment (Japan) Inc.

3

J.S. バッハ
無伴奏ヴァイオリン・パルティータ 第二番
ニ短調 BWV 1004 から シヤコンス
ユードイ・メニョーイン (ヴァイオリン)

Johann Sebastian Bach:
Violin Partita No.2 in D
Minor, BWV1004: V.
Chaconne
Yehudi Menuhin (violin)
©2001 Naxos Rights US,
Inc.
Licensed by NAXOS
JAPAN, Inc.

4

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
交響曲 第三番 英雄から第一楽章
ヴァイルヘルム・フルトヴェングラー指揮
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

Ludwig van Beethoven:
Symphony No. 3 "Eroica"
in E-Flat Major Op.55
Wilhelm Furtwängler
Berliner Philharmonisches
Orchester (Berliner
Philharmoniker)
Recording: Titania Palast,
December, 1952
©2008 TAHRA
Licensed by TAHRA /
KING International Inc.

5

モリス・ラヴェル
水の戯れ
マルタ・アルゲリッチ (ピアノ)

Maurice Ravel: Jeux
d'eau, M.30
Martha Argerich (piano)
Recording: July, 1960
©1961 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

6

フランツ・シューベルト
ピアノ・ソナタ 第11番 ヘ短調
D.959 から 第三楽章
アンドラーシュ・シフ (ピアノ)

Franz Schubert: Piano
Sonata No. 11 in F Minor,
D959-3. Allegro
András Schiff (piano)
Recording: April, 1993
©1995 Decca Music
Group Limited
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

7

フレデリック・ショパン
舟歌 嬰へ長調 作品 60
マルタ・アルゲリッチ (ピアノ)

Frederic Chopin:
Barcarolle in F Sharp,
Op.60
Martha Argerich (piano)
Recording: July, 1960
©1961 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

8

フランシス・プーランク
オーボエ・ソナタから第一楽章 エレジー
バスカル・ロジェ (オーボエ)
モリス・プーランク (オーボエ)

Francis Poulenc: Sonata
for Oboe and Piano, FP.
185: I. Élégie
Pascal Rogé (piano),
Maurice Bourgue (oboe)
Recording: February, 1988
©1989 Decca Music
Group Limited
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

1

リヒャルト・ワーグナー
舞台神聖祝典劇「パルジファル」から
第一幕への前奏曲
ハンズ・クナッパースツシュ指揮
バイロイト祝祭管弦楽団

Richard Wagner: Parsifal,
WWV 111: Prelude
Orchester der Bayreuther
Festspiele, Hans
Knappertsbusch
Recording: August, 1962
(LIVE)
©1964 Universal
International Music B.V.
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

2

セザール・フランク
ヴァイオリン・ソナタイ長調から第一楽章
ジャン・ジャック・カントロフ(ヴァイオリン)
ジャック・ルヴィエ(ピアノ)

César Franck: Sonata in A
Major for violin and piano:
I. Allegretto ben moderato
Jean-Jacques Kantorow
(violin), Jacques Rouvier
(piano)
Recording:
Concertgebouw, Haarem,
Netherlands, August 15,
18 & 22, 1982
Producer: Yoshiharu
Kawaguchi
Balance Engineer: Peter
Willemoës, Tape editor:
Hideki Kukizaki
©1983 NIPPON
COLUMBIA CO., LTD.
Licensed by NIPPON
COLUMBIA CO., LTD.

3

アントン・ブルックナー
交響曲第五番変ロ長調から第一楽章
ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

Anton Bruckner:
Symphony No. 5 in B-Flat
Major: I. Berliner
Philharmoniker, Herbert
von Karajan
Recording: December,
1976
©1977 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

1

ジョン・アダムズ
フリギアアの門
ラルフ・ヴァン・ラート(ピアノ)

John Coolidge Adams:
Phrygian Gates
Ralph van Raat (piano)
©2007 Naxos Rights US,
Inc.
Licensed by NAXOS
JAPAN, Inc.

2

クロード・ドビュッシー
フルード、ヴィオラとハーブのためのソナタから
第一楽章
トリオ・メデイシス

Claude Debussy: Sonate
pour flûte, alto et harpe: I.
Pastorale
Trio Medicis
Recording: July, 2002 at
the fondation Tibor Varga
(Sion-Switzerland)
Producer: Michel Stockhem
©©2003 Enki productions
Licensed by Cypres
Records

3

マヌエル・プレンカフォルト
過ぎ去りし日々の覚書 La Luna Brilla
ミケル・ビリャルバ(ピアノ)

Manuel Blancafort: Notes
d'anany (Notes from
Years Gone By): La Luna
Brilla
Miquel Villalba (piano)
©2003 Naxos Rights US,
Inc.
Licensed by NAXOS
JAPAN, Inc.

4

ヨハネス・ブラームス
4つのピアノ小品作品二から第一曲口短調
ヴァレリー・アフアナシエフ(ピアノ)

Johannes Brahms: 4 Piano
Pieces, Op. 119, No. 1.
Intermezzo in B Minor
Valery Afanassiev (piano)
Recording:
Stadsgehoorzaal, Leiden,
The Netherlands, March
9-10, 1992
Producer & Balance
Engineer: Gerhard Betz
Executive Producer:
Yoshiharu Kawaguchi
©1992 NIPPON
COLUMBIA CO., LTD.
Licensed by NIPPON
COLUMBIA CO., LTD.

5

フレデリック・ショパン
24の前奏曲作品28から第一番ハ長調
サンソン・フランソワ(ピアノ)

Frederic Chopin: 24
Preludes, Op. 28: No. 1 in
C Major
Samson François (piano)
©1959 Parlophone
Records Limited.
Remastered ©2011
Parlophone Records
Limited, a Warner Music
Group company
Licensed by Warner Music
Japan Inc.

6

ロベルト・シューマン
交響的練習曲 作品13から
Theme, Andante

14 13 12 11 10 9 8 7 6
Etude I
Variation II
Etude III
Variation III
Variation IV
Variation V
Variation VI
Variation VII
イヴォ・ボゴレリッチ(ピアノ)

4

ロベルト・シューマン
ピアノ三重奏曲第三番短調から第一楽章
ボロディン・トリオ

Robert Schumann: Piano
Trio No. 3 in G Minor
OP.110: Bewegt, doch
nicht zu rasch
Borodin Trio
©June, 1990 Chandos
Records Ltd
Licensed by Chandos
Records Ltd

5

クロード・ドビュッシー
前奏曲集 第二巻から第五曲ヒースの茂る荒野
アルトゥロ・ベネデッティ・ミケランジェリ(ピアノ)

Claude Debussy: Préludes, Book II: 5.
Bruyères
Arturo Benedetti
Michelangeli (piano)
Recording: August, 1988
©1988 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

6

ガブリエル・フォーレ
ヴァイオリン・ソナタ第一番イ長調 Op.13から
第一楽章
バンスカル・ドウヴァイヨン(ピアノ)

Gabriel Fauré: Violin
Sonata No. 1 in A Major,
Op. 13: I. Allegro molto
Dong-Suk Kang (violin),
Pascal Devoyon (piano)
©1995 Naxos Rights US,
Inc.
Licensed by NAXOS
JAPAN, Inc.

15

Robert Schumann:
Symphonic Studies,
Op. 13:
Theme, Andante
Etude I
Variation II
Etude III
Variation III
Variation IV
Variation V
Variation VI
Variation VII
Ivo Pogorelich (piano)
Recording: September,
1981
©1982 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

16

Johann Sebastian Bach:
The Art of Fugue:
Contrapunctus 1
Fretwork
Recording: December,
2001
©2009 harmonia mundi
usa
Licensed by harmonia
mundi usa / KING
International Inc.

Frederico Mompou:
Cançons i danses
(1921-1962): VI (1942)
Frederico Mompou (piano)
©Editions Salabert, Paris/
Editions B. Marks New
York
©2012 Ensayo
Licensed by Brilliant
Classics B.V.

7

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
ピアノ協奏曲第二十番二短調 Op.54から
第二楽章 ロマンズ
ルドルフ・ゼルキン(ピアノ)
クラウディオ・アバド指揮
ロンドン交響楽団

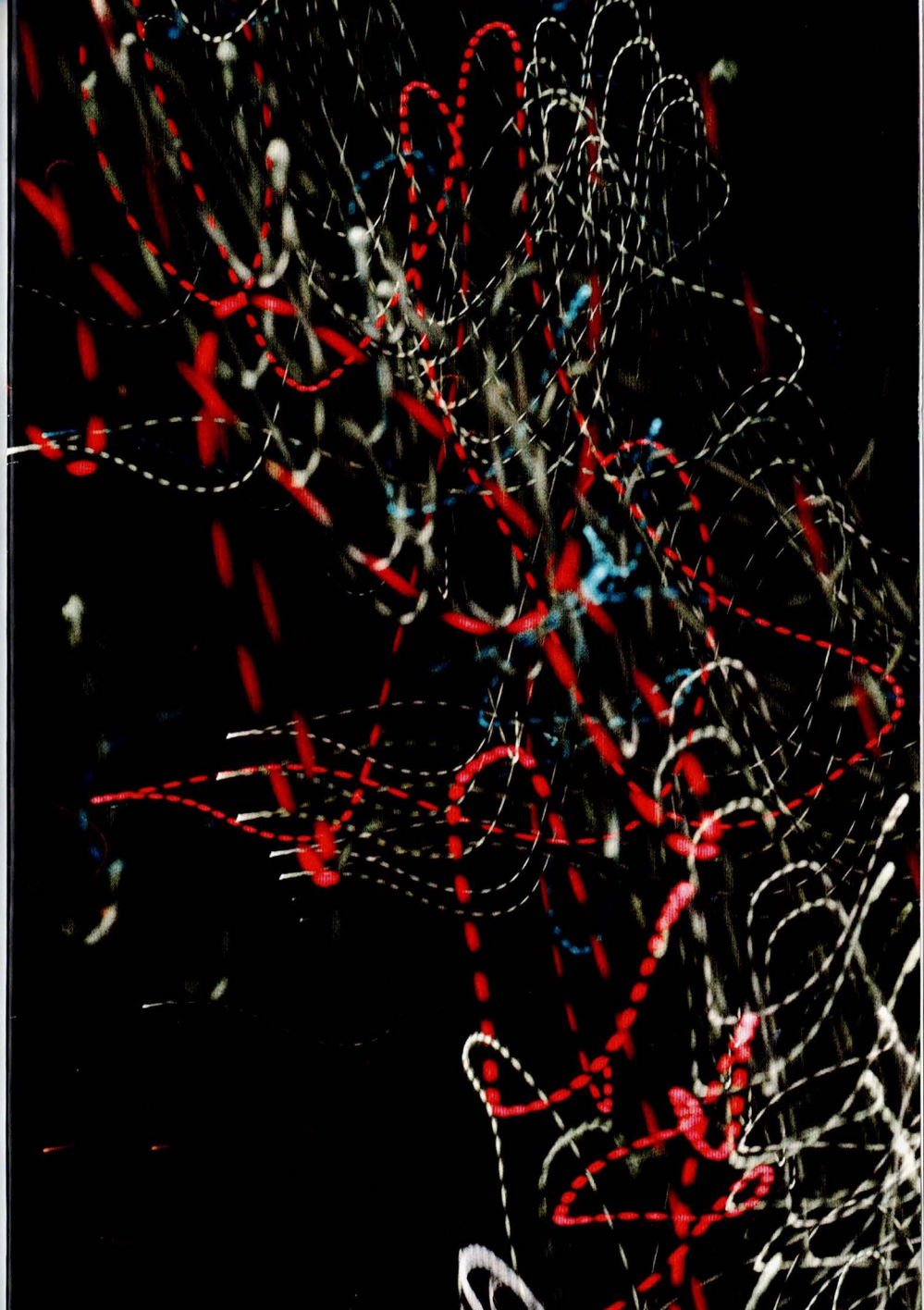
Wolfgang Amadeus
Mozart: Piano Concerto
No. 20 in D Minor, K. 466,
Romance
Rudolf Serkin (piano),
London Symphony
Orchestra, Claudio
Abbado
Recording: November,
1981
©1982 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

8

ドメニコ・スカラッティ
ソナタ短調 K.87
ウラディミール・ホロヴィッツ(ピアノ)

Domenico Scarlatti:
Sonata in B Minor, K.87
Vladimir Horowitz (piano)
Recording: September,
1985
©1986 Deutsche
Grammophon GmbH,
Berlin
Licensed by UNIVERSAL
CLASSICS & JAZZ, A
UNIVERSAL MUSIC
COMPANY

(収録曲変更について) 過去の収録の「クロード・ドビュッシー・フルード、ヴィオラとハーブのためのソナタから第一楽章」は本文中(第42回)では、フレデリック・カンパルラン(ハーブ、フィリップ・ベルノール(フルード))、ブルーノ・バスキエ(ヴィオラ)による演奏について紹介しておりますが、原盤権利者の許諾が得られなかったため、選者の意向でトリオ・メデイシスの演奏を収録させていただきました。



第25回

ストラヴィンスキー 春の祭典

20世紀の音楽を象徴する
「春の祭典」

ストラヴィンスキーのバレエ音楽「春の祭典」は、20世紀の音楽で最も重要な曲のひとつであることには、どなたも異論はないでしょう。20世紀の音楽には、調が特定できないもの、つまり「無調」の作品がたくさんあります。「春の祭典」は、ハ長調から始まりますが、この曲をハ長調の曲というには無理があります。というのも有名な冒頭のメロディは、ハ長調で書かれたリトアニアのフォークミュージックをベースにしたものなのですが、すぐ2小節目からはハ長調ではない対旋律が現れる。まったく違う音がぶつかってきます。全編を通して、調がはっきりしているような、していないようなまま展開していくので、この曲を何調と定義するのは難しいのです。

通常はオーケストラによって演奏されますが、もとはピアノの連弾のために作曲されたもので、のちにストラヴィンスキーがオーケストラ用に編曲したのです。今からちょうど100年前、パリで初演された際、客同士がケンカするほど、この曲に対する意見が分かれたというのは、有名なエピソードです。バレエ音楽なのに怒号で演奏がかき消され、ダンサーたちは踊れなくなってしまう。ドビュッシーをはじめとする有名な作曲家も聴きに来ていて、巨匠サン＝サーンスなどは冒頭で帰ってしまったそうです。

初演の2年ほど前に、ピアノの連弾が完成しました。ロシア・バレエ団のディアギレフからの注文を受けて書かれたもので、彼に聴かせなきゃいけない。そのとき、ストラヴィンスキーは、なんとドビュッシーと連弾したんです。残念ながら、その録音は残っていませんが、どう弾いたのか想像するだけで本当にワクワクします。ドビュッシーの弾き方は、今の私たちが耳にする演奏とは違い、驚くほどテンポが正確ではなく、揺れるのです。そういうドビュッシーが駆け出しの若いストラヴィンスキーと連弾して、彼を次の時代を担う新しい才能として見抜き、同時に自分の時代ではなくなっていくことを悟ったのかもしれない。演奏は、NOFO（ゾフォ）という若いデュオを選びました。このアルバムで、グラミー賞にノミネートされました。「春の祭典」のピアノ版があることはあまり知られてはいませんが、ぜひオーケストラ版と聴き比べてみてください。

第26回

ドビュッシー 交響詩海

過激で明快な
ブーレーズの「海」

今回取り上げるのは、ドビュッシーの作曲による「交響詩海」。この曲は全編を通じて、変ニ調をもとにして書かれています。第1楽章の終わりも、最後の楽章である3楽章の最後も変ニで終わっているけれど、曲はロの音から始まります。なぜか冒頭だけ、変ニからほど遠い音から始まっていて、とてもユニークですね。前回ご紹介した、ストラヴィンスキーの「春の祭典」と同じく20世紀を代表する大事な曲のひとつ。これまでドビュッシーの音楽は印象派と称されてきましたが、最近では、絵画の様式をそのまま音楽に当てはめてしまうことは荒唐無稽だという考えが広まってきました。また音楽的にも、印象派のきらめく光より、象徴派的なぼやけた深い色彩がふさわしい気がします。

さて、ブーレーズは「海」を2回録音しています。今回ご紹介するのは、最初の1966年のもの。のちの90年代にクリーヴランド管弦楽団で録音されたものより、僕はこちらのほうが若くて挑戦的でよいと思います。ブーレーズは、ドビュッシーは印象派であるとか、そのような捉え方自体を否定する戦法をとっています。この録音にはそれがよく表れていて、従来オーケストラで演奏されたのとはまるで違います。それまでは、モネの絵や、光の戯れように、何を弾いているかわからない伴奏的な部分がかったのが、ブーレーズの「海」は、このもやもやしたところが一切ありません。100パーセント細部にまで照明を当てるように、スコアに書かれている一音一音を、くつきりと浮かび上がらせてしまう。とても過激で面白い。

僕は高校生のときに初めて聴いたのですが、演奏がそれまでのドビュッシー的ではなくて、バランスが悪く、むしろ不自然に思ったくらいでした。だけど、聴いているうちに気持ちよくなりました。今は大好きです。ブーレーズの音楽性もこのあとずいぶんと変化していきます。このころが一番攻撃的だったのではないでしょうか。彼の演奏から教えられたことはたくさんあって、彼が取り上げてきたマーラーや、ブルックナー、シューベルトなど、今になって、どうしてブーレーズがこれらの曲に挑戦したのかわかるようになりました。ブーレーズによって、僕の耳もずいぶん鍛えられたのです。

第27回

バッハ

無伴奏ヴァイオリン・

パルティータ 第2番

ニ短調 シャコンヌ

遥か彼方の

メキシコへの憧憬



今回は、バッハの「パルティータ 第2番 ニ短調 シャコンヌ」をご紹介します。とても有名な曲なので、一度は耳にしたことがあるかもしれません。ただ非常に演奏が難しく、これまでに数えきれないくらい多くの演奏家がチャレンジしていて、数々の名演があります。僕が数多く聴いた中では、若き日のユーディ・メニュートンによる1934年録音の演奏が一番。メニュートンは、ほんとうに天才です。後年、若きグールドとも演奏したことがあります。ふたりの歳はおじいさんと孫のように違うのに、とても仲がよかった。メニュートンぐらゐの天才だからこそ、グールドの才能もすぐに見抜き、天才同士、お互いに尊敬し合っていたのでしょう。まるでドビュッシーとストラヴィンスキーのような関係です。一緒に演奏している映像も残っていますが、グールドは大權威のメニュートンに、「僕はこう思う」と生意気にも音楽性の違いを指摘していて、面白いです。

シャコンヌという形式は、8小節くらいの短い音楽を次々と変奏していくのですが、驚くことに、その発生地は中南米のメキシコあたりといわれています。録音機器もない時代に、そんな遥か彼方の情報がヨーロッパに入ってきたんですね。宮廷の音楽だったのか、それともサロンやバブの音楽なのかはわかりませんが、ギターで弾かれた曲を模したのではありませんかと考えられます。シャコンヌには3音、4音使った和音が出てきますが、ヴァイオリンの弓は1本、弦は4本しかないのです、この和音を弾くのがものすごく難しい。隣り合っている弦で2つの和音を弾くのはまだしも、3音、4音の和音をヴァイオリンひとつでやるのはなかなか大変。ギターだと和音が弾きやすいのですが。

バッハといえばドイツの教会で僧侶のような生活を送り、音楽のためだけに生きたようなイメージがありますが、実際は世界に対する好奇心が貪欲にありました。当時は、異国の珍しい情報がヨーロッパ中で流行し、探検記や旅行記、博物誌などの書物がよく売れたそうです。バッハもそういう本をたくさん読んでいて、知らない世界への憧れがあったのでしょう。もしかしたら、メキシコにも行ってみたいと夢を膨らませ、このシャコンヌを作ったのかもしれない。

第28回

ベートーヴェン 交響曲第3番 英雄

古典派からの「逸脱」を
めざした「英雄」

今回取り上げるのは、ベートーヴェンの「交響曲第3番 英雄」です。指揮は僕の大好きなフルトヴェングラー、演奏はベルリン・フィルです。彼が指揮している映像を見ると、よくこれでオーケストラの皆が演奏できるなと思うぐらいわかりにくい。いったいどこで音を出せばよいのかもわからない。あれは存在感で指揮をしているようなものでしょう。彼の指揮は、テンポの揺れが面白いといわれています。これは20世紀の人には理解できない、19世紀的な独特のテンポ感ではないでしょうか。ドビュッシー自身が弾くピアノ演奏のように、フルトヴェングラーも一定のテンポでは演奏しません。今のように一定のテンポで機械的に演奏するようになったのは20世紀に入ってからです。僕は、今となつてはよくわからない19世紀的なテンポ感を、このような演奏から想像したりするわけです。

フルトヴェングラーは、第二次世界大戦時はナチスの記念コンサートに参加し、戦後、パッシングを受けたりもしました。でも、じつは戦中にベルリン・フィルのユダヤ系団員たちを一生懸命逃がしたこともあります。ベルリン・フィルとは結びつきがとても強いんです。ですから、フルトヴェングラーといえば、ベルリン・フィル。かつてのベルリン・フィルは、ドイツ人中心に構成されていましたが、今は多国籍でインターナショナルなオーケストラです。でも相変わらず独特で音色、音楽性が素晴らしく、ウィーン・フィルと並んで世界屈指のオーケストラであることは変わりません。

ご存じの方も多いと思いますが、「英雄」は、ナポレオンに触発されて作曲されたもの。作曲中に皇帝に即位したナポレオンに対し、ベートーヴェンは激怒したといわれています。18世紀以来の、自由と民主主義を求める気持ちが強かったからでしょう。ナポレオンがヨーロッパを解放してくれると期待していたのです。

音楽史上、ベートーヴェンは古典派に属していますが、非常にロマンティックなところがあります。ハイドンやモーツァルトが古典派だとすると、ベートーヴェンはそこから「逸脱」しようという意志が強かった。まさに「伝統からの逸脱」です。それは第1楽章から表れています。形式は古典派的ではありますが、当時の人たちは、「英雄」は古典派の交響曲と比べて異様に長くてびっくりしました。その「逸脱」が僕の好きなのところなのです。



第29回

ラヴェル 水の戯れ

「水の音楽」の
奥深い魅力を味わう



僕はアルゲリッチが好きで、よく聴きます。とりわけ今回紹介するラヴェルの「水の戯れ」は、若き日のアルゲリッチによる演奏で、才気がほとばしっています。初めて聴いた方は、そのみずみずしさ、荒々しさに驚くのではないでしょうか。

ドビュッシーが、ショパンやリストのピアノズムを受け継ぎ発展させていく一方で、若きラヴェルも独自に模索しました。どちらかといえば、ラヴェルのほうがリストに近いと思います。ふたりは13歳しか歳が違わないのに、演奏は驚くほど異なります。ドビュッシーからは19世紀の、ラヴェルには20世紀の演奏を感じるので。20世紀は即物的な弾き方が流行り、ラヴェルもメカニカルに一定のテンポで演奏しました。これはラヴェルが書いた譜面にも反映されています。ところがアルゲリッチは、20世紀の演奏を19世紀に引き戻すわけではないけれど、ラヴェルをものすごくエモーショナルに弾くのです。ある意味で脱構築ですね。ラヴェル自身が弾いている録音もありますし、ラヴェルの弟子、ベルミュテールによるラヴェル直伝の演奏もいくつか出ているので、アルゲリッチと聴き比べると面白いと思います。

「水」というテーマは、とてもピアノ向きです。ピアノの音は弦楽器や管楽器などと異なり、音がすぐに減衰します。それが水滴や水の分子などを想像させます。ドビュッシーも水をテーマにした音楽を多数作っていますが、同じ水を巡りたとしても、ドビュッシーとラヴェルでは系統が違出し、もっといえば音楽性の違いまでもが伝わってきます。

僕も水に興味があって、「水の中のバガテル」というピアノ曲を作っています。高谷史郎さんと一緒にやった「Life-fluid, invisible, inaudible...」というインスタレーションにも水を使いました。2013年の11月にはYCAM（山口情報芸術センター）で水をテーマにした新たなインスタレーションを発表する予定です。水は、氷、霧、雲などいろいろな状態があつて魅力は尽きません。森林保全団体「モア・トゥリーズ」の活動をしていて思うのですが、木というのも立っている水で、直立した水ともいわれています。水は命の循環の根源で、これからも、水というテーマを発展させていきたいと思っています。



第30回

シュューベルト ピアノ・ソナタ 第11番 第3楽章 へ短調

「逸脱」の不思議さに
心惹かれる

アンドラーシュ・シフは才気走ったピアノリストではありませんが、彼が弾くシュューベルトは、とても丁寧で安心して聴くことができます。奥様はヴァイオリニストの塩川悠子さんですが、彼女の演奏するバルトークやバッハも僕は大好きということもあって、シフには、とても親近感があります。

シュューベルトを聴くようになったのは、ほんとうに最近のことです。もともとロマン派嫌いを自認していましたが。ところがマーラーを聴きこんでいくと、彼が影響を受けたブルックナーやシュューベルトにも関心が沸いて、聴くようになりました。この「ピアノ・ソナタ 第11番 第3楽章」は、まるでショパンの曲のようです。ショパンの「ピアノ・ソナタ 第2番」の最終楽章とかなり似ているし、「プレリュード 第14番」という速い曲とも似ています。どちらがどう影響されたかという史実までは知らないのですが、とても面白い。

僕にとってのシュューベルトの面白さは「逸脱」にあるんです。彼が生きていた時代は、ベートーヴェンと変わらないのですが、明らかに古典派からは一歩踏み出してしまっています。じつにロマンチックな作曲家ですね。

この曲も未完成ですが、シュューベルトには未完成のものがたくさんあります。彼はひどく貧乏で、学校の先生をしながら生計を立てていたようですが、バツと楽想が沸くと、我慢できずに授業中にもかかわらず教室の黒板に楽想を書いたり、そのへんにある紙に急いで書き散らしたそうです。まとめるタイプではなかったし、そのうえ短命でしたから。

この曲はバツセージも早いし、ふつと沸いたインスピレーションをそのまま書き付けた感じがします。じっくり推敲を重ねて作った曲ではないのでしう。第1楽章と第3楽章はへ短調なんです。真ん中の第2楽章が半音低いホ長調という、古典派の調性ではありません。これは明らかに、のちのマーラーなどにも影響を与えていると思います。びっくりすることが突然現れてドキドキする。その「逸脱」の不思議さに惹かれるのでしょうか。



第31回

シヨパン 舟歌

嬰へ長調の不安定な
響きが生む揺らぎ

どちらかといえば、シヨパンはそんなに好きな作曲家ではありませんが、「子守歌」と「舟歌（バルカロール）」だけはとても好きで、子どものころは、よくベルリムテールの演奏する盤を聴いていました。今回ご紹介するのは、アルゲリッチの演奏によるもの。とても生き生きとして、若さが感じられます。「バルカロール」とはヴェネツィアのゴンドラ漕ぎが歌う舟歌のようなもので、クラシックでは複数の作曲家が曲を作っています。シヨパンのこの曲は嬰へ長調で書かれ、まさにゴンドラが揺れるような、とても不安定な調性です。嬰へ長調の曲は古典時代にはあまり出てきません。近代に入り、ドビュッシーの時代になってからも、嬰へ長調で書かれた音楽は大変珍しがられました。平均律で調律された現代のピアノではわかりにくいのですが、シヨパンの生きていた19世紀のピアノで聴いたら、嬰へはさぞかし不安定な響きがしたことでしょう。この「舟歌」独特の揺らぎは、明らかにドビュッシーに影響を与えたと思います。

シヨパンは当時のピアノリズムを大きく前進させた音楽家のひとりです。彼抜きにその後のピアノ音楽の発展は考えられません。シヨパンは明らかに和音中心に音楽を作っていく作曲家ですが、フーガなども作っています。おそらく対位法的な作曲の観点が足りないといふから省みて、フーガを習得しようとしたのだと思います。多くの作曲家は、後年になって対位法を学ぶことが多く、ベートーヴェンもサティも後半生、対位法を習得して、音楽がより豊かになっていきましたが、シヨパンはあまりに若くして亡くなったので、対位法を自分のものにしたとは言い難いですね。

僕は、シヨパンは装飾的であり好きなタイプの作曲家ではないのですが、ドビュッシーが装飾の見方を変えるような面白いことを言っています。「バッハの素晴らしさは、その装飾的な線にある」と。バッハを装飾的だというのは驚くべきことですが、そんなふうにドビュッシーは捉えているんですね。さすがです。装飾的な「効果」ではなく、装飾性「そのもの」を見るというのは案外面白いことかもしれません。

第32回

プーランク

オーボエ・ソナタ

第1楽章 エレジー

明朗で美しい

プーランクの「エレジー」

今回は、プーランクの「オーボエとピアノのためのソナタ 第1楽章」をご紹介します。オーボエの演奏はモリス・ブールグ、ピアノの演奏はエスプリの代表ともいえる、バスカル・ロジェです。この曲は、プーランクが亡くなる直前に完成されたといわれています。非常に美しい「エレジー（悲歌）」です。時々、ラジオで流れたりするので、ご存じの方も多いのではないのでしょうか。

これは戦後、1962年に作られた曲ですが、ト長調と調性も明快。モーツァルトの音楽のように朗々としたわかりやすいメロディがあり、そしてポップなピアノの伴奏があるという、ある意味、古典的な曲なんです。どうしても「戦後の曲」というとノイジーな現代音楽が多いので、プーランクを知らない人が聴いたら、いったいいつの時代の人が作ったんだろうと驚くぐらい明朗な音楽です。

プーランクやオネゲル、ミヨーといった20世紀前半に活躍した「フランス6人組」は、19世紀のロマン派とはまったく違う音楽を示したドビュッシー、ラヴェルという、ものすごい作曲家たちを先輩にもついていたわけです。ロマン派とも、ドビュッシーやラヴェルとも違った音楽を作らなくてはならなかったもので、どんどん狭いところに向かっていきました。オネゲルの映画音楽など、もちろん面白い曲はたくさんありますが、先輩たちほど豊かな音楽を作れなかった気がします。にもかかわらず、6人組の中でプーランクは、特に美しいメロディを作った作曲家といえます。

オーボエとピアノというと、不思議な組み合わせに見えますが、じつはドビュッシーが晩年に構想していた「様々な楽器のための6つのソナタ」には、オーボエが含まれています。途中で亡くなってしまったので、実際は3曲しか作曲されず、オーボエを使ったソナタは未完となりました。晩年、プーランクは、思いがかなわなかった大先輩ドビュッシーの遺功を受け継いで、「オーボエとピアノのためのソナタ」を書いたのかもしれない。



第33回

ワグナー

舞台神聖祝典劇

『パルジファル』

19世紀の音楽観の
謎を探る手がかり

ワグナーの音楽は、正直なところ苦手なのですが、『トリスタンとイゾルテ』の序曲と、今回ご紹介するオペラ『パルジファル』だけは、子どものころからよく聴いてきました。遺作として知られる『パルジファル』はドラマティックではなく、神秘的なアンビエント・ミュージックのようで、とても瞑想的。退屈だと感じる方もいるようですが、僕は好きです。じつは、1999年に発表したオペラ『「E」を作ったときに参考にしたのが、この『パルジファル』でした。好きなオペラといったら、これぐらいしかなくて、ずいぶんいろんな角度から考察してみたのですが、結局、このドラマが何を問題としているのか、その本質がわかりませんでした。村上 龍さんにオペラの脚本をお願いしていたので、彼ともたくさんやりとりしましたが、肝心なところがわからない。「聖杯」という、キリスト教文化の根本にあるテーマを巡る話なのですが、どうしてそんなに悩んでいるのか。「トリスタンとイゾルテ」は悲劇のパターンを踏んでいるので理解できますが、『パルジファル』はほんとうに難しい。

ワグナーは、ロマン派の頂点ともいえる作曲家です。でも僕は、どちらかというと、譜面に書かれた彼の音符に興味があります。なんていったらよいのか、ワグナーの場合は、ものすごい力技で書いていて、とにかく勉強になるんです。『マイスタージンガー』は、ジャーンジャーンと軍隊の行進曲のようにわかりやすく響くのですが、じつは弦が複雑に絡んで書かれています。

この『パルジファル』の指揮者で、20世紀初期に活躍したクナッパーツブッシュや、フルトヴェングラーもそうですが、ロマン派的な19世紀の音楽観とはいったい何だったのか、20世紀に入って何が変わったのか、僕にとってはそこが大きな謎です。一般的には20世紀の音楽は、その前の時代に対する反動から機械的あるいは即物主義的な演奏ともいわれていますが、じつのところどうなのか、僕にはまだ具体的にわかりません。19世紀の音楽のもつテンポの揺らぎや不安定さの秘密をもっとしっかりと探りたいと思っています。

第34回

フランク

ヴァイオリン・ソナタ

イ長調

熟思のあとがにじみ出る
「ヴァイオリン・ソナタ」

この曲は一般的にはあまり有名ではないかもしれませんが、音楽を学ぶ者にとつてはとても重要な曲で、作曲家は必ず勉強します。フランクは、ドビュッシーやラヴェルよりも知られていない作曲家かもしれませんが、19世紀中盤以降の音楽家で彼の影響を受けなかった人はいないでしょう。とりわけ彼は優秀なオルガン奏者であり、またよき教育者でした。弟子にはダンディ、ショールソン、デューバルクなど有名な作曲家がいます。フランク自身は人生の後半になってから作曲を始めました。とても遅咲きですね。この「ヴァイオリン・ソナタ」を手がけたのも60歳を過ぎてから。地味ではありますが、ものすごく真面目で、熟思した結果、生まれてくる音楽を残したのです。「交響曲ニ短調」も彼の代表作です。ほかに、敬虔なキリスト教徒としてオルガン曲や宗教音楽も作りました。どれもバツハやベートーヴェンなど、ゲルマン系の伝統を受け継いだような、非常にしつかりした構造をもっています。またワーグナーからも大きな影響を受けていますね。

フランクの「ヴァイオリン・ソナタ」は、よくドビュッシーの「ヴァイオリン・ソナタ」とカプリングになっているので、僕も子どものころ、B面に入っていたのを聴いたのだと思います。ドビュッシーのような可憐さではなく、北ヨーロッパ的というか、沈思黙考のような感じがして、最初はよく理解できませんでした。でも高校生のころに、講面を買ってきて分析したら、よく考えられた曲だなと思ったのを覚えています。

ドビュッシーの「ヴァイオリン・ソナタ」は、遺作にもかかわらず軽妙洒脱。ピアノとヴァイオリンの対話がコケティッシュで、ほんとうに洒落ている。一方のフランクは、まるで弁証法の哲学談義を聴いているよう。でも、フランクのことを嫌いだという音楽家はあまりいません。才気煥発というわけではありませんが、尊敬されていますし、この「ヴァイオリン・ソナタ」は、ヴァイオリニストであれば、必ずといっていいほどレコーディングする曲です。ヴァイオリンの演奏はカントロフ、ピアノはルヴィエ。僕はカントロフがとても好きで、彼がレコーディングしたドビュッシーやラヴェルも気に入っています。僕が好きなグールドは、カントロフを絶賛しています。ルヴィエも僕が好きなベルミュテルの教え子ですから、弾き方や音の響きなどに僕の好みと共通するものが、きっとあるのだと思います。





第35回

ブルックナー

交響曲 第5番

孔雀のような優美さを湛えた
ブルックナーの交響曲

僕がロマン派を代表するブルックナーやマーラーを本格的に聴き始めたのは、つい最近のことです。正直なかなか好きにはなれなかったどころか、曲さえ覚えられなかったのですが、音楽全集『schola』のために聴きこんでいるうちに、だんだん親しみが湧いてきました。ブルックナーというと、宗教的でロマンティックで重いイメージがありますが、変ロ長調のこの曲は、まるで孔雀が歩いているような優美さをもっていて、ブルックナーにもこういう面があるんだと思い、新鮮でした。

一種、アンビエント・ミュージックのようにブルックナーやシューベルトの音楽を聴く人がいると聞いて、なるほどと思つて聴き始めたところもあります。長いといえば、ブルックナーの少し先輩になるシューベルトの遺作の「ピアノ・ソナタ 第21番」も長い。ふつうに聴くと眠たくなってしまうような感じがしますが、アンビエント・ミュージックとして聴くと、なかなか面白い体験です。一部のロマン派の音楽が、どうしてこんなに長いのかわかりませんが、瞑想的なものを求めていたのでしょうか。

ロマン派の時代が終わる20世紀に入ると、音楽の世界は19世紀的な暗くはじめられて、壮大でロマン派的なものはいかんといい潮流が変わっていきます。ラヴェルやサティは、ドビュッシーですら19世紀的だとして、そこからもつと離れた、軽妙洒脱で、深刻でも長大でもないものを作ろうとします。これは80年代に起こったポストモダンの流れとも似ているかもしれません。この流れは20世紀の後半にも続き、僕も影響を受けています。ロマン派から抜け出すという考えを不思議なことに共有していたんですね。それぐらいロマン派の縛りは強かったわけです。

指揮はカラヤン率いるベルリン・フィルです。カラヤンは見事に冒頭の優美さを引き出しています。僕が子どものころ、カラヤンが来日したことがあって、テレビで見てとてもファンになりました。指揮がはんとうに美しいし、音楽家としても素晴らしいと思います。深く音楽を理解し、オーケストラをまとめる力は飛び抜けています。

第36回

ブラームス

4つのピアノ小品

作品119

第1曲 間奏曲 口短調

一筆書きのように儚い 「間奏曲」

今回は、ブラームスが最晩年に書いたピアノ曲から、「4つの小品」として知られる間奏曲を取り上げます。僕は、子どものころからブラームスだけはロマン派の中で例外的に好きでした。グールドが弾く「間奏曲」が収録されたレコードが家にあり、ほんとうに好きで何度も聴いていたことをよく覚えています。高校に入ってから、譜面を買って、自分でもよく弾いていました。技術的にも難しくないので簡単に弾けてしましますね。

もともと間奏曲というのは、その名の通り、オペラなどで幕と幕の間に演奏されていたものですが、シューマンやブラームスはそれを独立させてしまって、ロマン派的なピアノの小品という性格を与えたんです。本体の間に挟まれていたものが、本体を取り払われてしまったことで、その存在自体が非常に儚く、宙に浮いているような不安定さを醸し出し、それがロマン派的な内面の揺らぎを表すのにぴったりだったのかもしれない。

一般的にはロマン派の音楽というと、重厚長大で、甘いと思われがちです。ブラームスもしっかりと構築された交響曲やピアノ・ソナタをたくさん残していますが、僕はこの曲のように儚くて、一筆書きのようにさらっと書いた彼の一面がとても好きなのです。このような儚さや「わびさび」というのも、ロマン派の特徴なのではないでしょうか。

演奏はロシアのピアニスト、アフアナシエフによるものです。僕は小さいころからずっとグールドの演奏を聴いていたので、あとになってアフアナシエフの盤を聴いたとき、グールドと比べてテンポが遅く、弾き方もずいぶん違っていて新鮮な驚きがありました。アフアナシエフはピアニストとして一級であるだけでなく、小説や詩も手がけるし、日本の「わびさび」や「もののあはれ」を深く理解している興味深い人です。彼のブラームスを聴くと、その持ち味でもある「望郷」や「ノスタルジー」、そして「儚さ」や「うつろい」というものが、とてもよく表れていると感じます。たまに僕もこの曲をコンサートで弾こうかなと思うことがあります。いつか挑戦してみたいですね。





第37回

シヨパン

24の前奏曲 作品28 第1番 ハ長調

激しさに衝撃を受けた
フランソワのシヨパン

シヨパンの『前奏曲集』は、音楽史の中でも重要な曲です。ドビュッシーも『前奏曲集』を書きましたが、明らかにシヨパンの影響が大きいと思います。前奏曲（プレリュード）というからには、本来ならば次に何かがくるわけです。バッハの『平均律クラヴィーア曲集』は、プレリュードとフーガが対になって展開していきます。ところがシヨパンは、フーガを取り除きプレリュードだけにしてしまいました。当時の人たちも、変だと思ったのではないのでしょうか。バッハの平均律では、半音ずつ順番に調が上がっていきますが、シヨパンの前奏曲では5度ずつ上がっていきます。意外な感じですが、シヨパンとベートーヴェンは生きた年代が近く、この『前奏曲集』もベートーヴェンの没後10年ほど経ってから発表されました。ちょうど前期ロマン派の百花繚乱の時代。音楽に自由を求める気風は強く、短い期間に起こる変化に驚きます。ポーランドというヨーロッパの片田舎で、それまでになようなピアノの技法や書法が開発されていたというのも興味深いですね。

彼のピアノリズムといえば、華麗なアルペジオや速いパッセージがよく挙げられますが、作曲技法的には「小品」が多いのです。これはひとつのアイディアで曲の最後までいくような、ある意味、今のポップスに近いところがあります。もちろんピアノ協奏曲のように長い曲も残っていますが、長い曲には美しいメロディを書くのとは異なる構成員が必要です。その点、ベートーヴェンなどとは対象的です。ベートーヴェンは長い曲を構成するために、あえて取るに足らないメロディをテーマとして選び、ブロックを積むように作曲することさえやりました。そのような発想や手法はシヨパンには見られません。むしろメロディが溢れ出てきてしまうような、即興的な要素が強いのです。

この演奏家、サンソン・フランソワはとてもラテン度が高いピアニストで、僕は子どものころ、初めてFM放送で聴き、その激しさに衝撃を受けました。シヨパン自身も彼のように弾いていなかったと思います。優等生的なポリーニのシヨパンも素晴らしいのですが、一度フランソワを聴くと忘れられません。こんなアクの強いシヨパンは彼以外には弾けないでしょう。この名演は必聴です。



第38回

シューマン

交響的練習曲

作品13

独特の色気を放つ

シューマンの練習曲

昔、母と一緒に、シューマンの「交響的練習曲」と、ラヴェルの「夜のガスバール」をコンサートで聴いて、とても気に入りました。子どもだったから、その音楽を深く理解していたわけではないんですが、改めて聴いてみても、非常に魅力的な曲ですね。タイトルに「練習曲」とありますが、じつはこれは「変奏曲」です。技巧的に難しいところもあるけれど、子ども時代には好きな変奏曲を繰り返し弾いたのを覚えています。

タイトルにあるように、シューマンは、シンフォニクな響きをイメージしてこの曲を作ったのでしょう。彼は技巧的に難しい曲を数多く残しています。ユニクな人で、ピアニストを目指していたのですが、激しい練習がたたりピアノが弾けなくなってしまうました。けれども、優れたピアニストであつたクララ夫人の助けもあつて、作曲を続けました。大作も書いていて、ショパンより即興性は低いけれど、ユニクな構成の音楽をたくさん作りました。ブラームスの才能をいち早く認め世に出したのもシューマンで、彼亡きあとともブラームスとクララは生涯のよき友であつたといえます。

シューマンには、独特の色気がありますね。この曲もそうですが、どこかエロティックな感じがします。ほかのシューマンの音楽も、一度聴くと忘れられなくなってしまう、クセになる魅力があります。

この曲は、僕の大好きなリヒテルによる録音もありますが、今回はポゴレリッチによるものを選んでみました。ポゴレリッチは、自分のピアノの先生である、20歳も年上のアリザと結婚したユニクで天才肌のピアニストです。アフアナシエフよりも遅いテンポで演奏する曲もあるぐらい独特な弾き方をするので、正直、彼が弾く演奏には、とても好きなのとそうでもないものがあります。ですが、彼のテクニクは抜群に素晴らしいし、音色がほんとうに美しい。ポリーニ、アシケナージといろいろとこの曲を聴き比べたのですが、音色のみずみずしさ、テクニクの安定度など総合点ではポゴレリッチが一番だと思います。優等生のポリーニにも勝るでしょう。もちろんポリーニもとてもうまいのですが、破綻がどこにもなくて、優等生すぎて、僕には面白くないんです。ぜひ、ポゴレリッチのみずみずしさを聴いてみることをおすすめします。

第39回

バッハ

フーガの技法

古楽器の味のある
響きを聴く

バッハが残した数多くの音楽の中でも、この「フーガの技法」は長大な曲集です。ふつう、フーガはひとつのテーマがさまざまに展開されるのですが、この最後の曲では、3つのテーマが登場します。その中のひとつは、自身の名前と同じ、B・A・C・H（変ロ・イ・ハ・ロ）なんです。「バッハ」とはドイツ語で「小川」を意味しますが、バッハのその後の音楽史に与えた影響を考えると、「小川」は大きな海、大洋になっていったんですね。亡くなる数カ月前に目が見えなくなり、作曲できなくなったといわれています。この最後の「未完のフーガ」は、通常バッハが筆をおいたところで突然演奏が終わるんですが、何度聴いてもこれには衝撃を受けます。

今でこそ、偉大な「音楽の父」として知られるバッハですが、生前は世間から忘れられたといってもいい存在だったのですから驚きです。教会にこもり、古臭いスタイルで作曲していた偏屈な音楽家というイメージだったのではないかと思います。そして没後、バッハの音楽は忘れられてしまい、その一方で息子のカール・フィリップ・エマヌエルは作曲家として高名になり、「古典派」の作曲家に大きな影響を与えました。19世紀、ロマン派の時代に入り、メンデルスゾーンが「マタイ受難曲」を演奏し、バッハの音楽が再評価されるようになりました。20世紀に入って、パブロ・カザルスが、それまで単なる練習曲と思われていた「無伴奏チェロ組曲」を偉大な芸術として甦らせました。昔は記録メディアがありませんから、演奏された音楽を残すことはできません。それに、わざわざ過去の音楽を演奏しなくても、その時代に書かれたものを聴いて楽しむのがよかったのです。今現在のように何百年も前の曲を何度も演奏する、ということはありませんでした。

僕が子どものころ愛聴していたのは、カール・リヒターの演奏によるレコードで、それはなぜか今もCDになっていないので、今回はフレットワークによる演奏を選びました。古楽のアンサンブルでは一番好きなグループで、僕のアルバムにも参加してもらったことがあります。バッハが生きた時代は、ちょうどヴァイオリンが古楽器のヴァイオリンにとって代わって主役になっていくころですが、まだまだヴァイオリンも活躍していました。この古楽器の味のある響きを聴いていただきたいと思います。

第40回

フェデリコ・モンポウ 歌と踊り第6曲

カタルーニャの心をうたう
モンポウのピアノ曲

今回は、知る人ぞ知るスペイン・カタルーニャ地方の作曲家、フェデリコ・モンポウの「歌と踊り」をご紹介します。僕は昔から彼を知っていたわけではなくて、1992年のバルセロナ・オリンピックの開会式のための曲を頼まれ、何度か現地に通ううちに、モンポウという音楽家のことを教えてもらったんです。

モンポウが残した音楽の多くは、ピアノと歌曲でした。大曲ではありませんが、小品のクオリティは高く、そして本人もピアニストになろうと思っていたほどで、とてもピアノがうまい。作曲家弾きの域を超えた、演奏家のものです。作曲家としてはドビュッシー、ラヴェル、サティ、フォーレらの影響があるといえますが、しかし、彼らにはない魅力があります。それはこの「歌と踊り」にも表れている、「カタルーニャ」という民族性でしょう。前半の歌の部分は嘆きのような、非常にセンチメンタルなメロディです。それからダンスになります。テレビなどでカタルーニャの祭りの映像を見ると、よく首にスカーフを巻いた人たちが、人間ピラミッドを作ったりしていますが、祝祭的で陽気に騒ぐ面もあって、この両面がカタルーニャ的だと僕は勝手に思っています。

もともとフランス、イタリア、スペインなどに囲まれ、歴史の中で翻弄されてきたカタルーニャの人たちは、その独立意識が有名ですが、40年余続いたフランコ政権下では、公にカタルーニャ語を使うことが禁じられ、童歌さえ歌えなかったそうです。モンポウも音楽においてはカタルーニャ人としての意識が強く出ていますが、意外なことに、政治的にはフランコ政権を支持していたそうで、複雑ですね。ヨーロッパのローカルな文化が、どうアイデンティティを求めるかというのは、今も続いている問題で、フランスなどの大国との緊張があれば、カタルーニャ人といえどもスペイン側につかなければならない。しかしEUができて、そういう緊張関係が緩くなると、それぞれ内包されていたローカルな文化の問題が浮上してくる。モンポウのようなシンプルな音楽にさえ、そんな今日的な姿がうかがえます。



第41回

ジョン・アダムズ フリギアの門

フリギアの旋法が奏でる
ミニマル・ミュージック

ジョン・アダムズは、彼の上の世代にあたるステイプ・ライヒと比べると、突き詰められたようなシャープなミニマリズムでもないし、誰が聴いてもすぐそれとわかるぐらいに、強烈に個性的というわけでもありません。むしろロマンティックだし、サービス精神が旺盛というか、ある種アメリカ的といってもよいのかもしれない。僕は、彼の音楽をそれほど聴いてこなかったのですが、食わず嫌いもいけないとちようど思っていたところ、たまたま、このラルフ・ヴァン・ラートというピアニストが弾いている盤を耳にしました。この曲は力を必要としないんです。オランダ出身のラルフ・ヴァン・ラートの演奏は、過剰に訴えようとしないところもないし、面白いし、何よりも美しい。テクニックもなかなかです。僕も譜面を買って弾いてみたけれど、意外と難しい。

タイトルは「フリギアの門」といい、中世のフリギア旋法に基づいて作られています。これは音楽で使う旋法のひとつで、古代ギリシャのフリギアという土地の名前に由来します。ただ、ほんとうの古代ギリシャの旋法とは違い、中世の音楽学者が名前を借りてまとめた8つのうちのひとつが、フリギア旋法です。でも、もともとギリシャで、そのフリギアという地方の名前を付けたということは、この旋法が何か独特の音感を表していたのでしょうか。ミニマル・ミュージックといえば、同じフレーズで反復されるものが多いのですが、この曲の場合、ライヒの方法とはずいぶん違います。というのも、正確に言えば、反復ではないからなんです。規則的な反復はなく、むしろ展開しているといってもよい。10歳ほど年上であった先輩格のライヒの影響が大きいだけに、そこから離れて自分の方法確立したかったのでしょう。しかし、使っている音は非常に限られているので、ミニマルな感じがします。

アダムズの音の使い方は、ブライアン・イーノの初期のアンビエント・ミュージック（環境音楽）に似ています。イーノがアダムズの影響を受けたのかその逆かわかりませんが、ふたりはミニマルとアンビエントの橋渡し役だったのかもしれない。

というわけで、ライヒの次の世代のミニマル・ミュージックをお楽しみください。

第42回

ドビュッシー
フルート、
ヴィオラ、ハープの
ためのソナタ

複雑な陰翳ある響きが
交差するソナタ

ドビュッシーは晩年、6つのソナタを作ろうとしましたが、完成できたのは3作品だけでした。僕はその中でもこの「フルート、ヴィオラ、ハープのためのソナタ」がとても好きで、皆さんにもぜひ3楽章を通して聴いていただきたい曲です。ハープとフルートはギリシャの壁画にもよく登場する、まさに古代の楽器です。ドビュッシーは、それにヴィオラを加えました。なんともいえない、ヴィオラのくすんだ音色が、陰翳を生んでいます。

ふつう「ソナタ」と聞くと、多くの方が、ベートーヴェンのようなドイツ的な厳格なソナタを想像すると思います。これに対し、ドビュッシーはあえて「ソナタ」と題して、異なる響きの音楽を作りました。このソナタは、とても静かな曲なのですが、その静けさの中には、非常に沸々としたものが充滿しているような感じがするのです。

フランス語で「音」のことを「son（ソン）」と言います。ドビュッシーはこのソナタで、音、響きの初源に還り、複雑な色と陰をもった響きが交錯し、運動するさまを表したかったのではないのでしょうか。

ところで、晩年、管楽器のソナタに取り組んだ作曲家にブラームスが挙げられます。ブラームスはドビュッシーが果たせなかった遺志を継いだのではないかと、僕は勝手に想像しているのですが、しかし音楽的には、いわゆるソナタ形式に則ったもので、その点は異なります。

このソナタの演奏は、ラスキン（ハープ）、ランバル（フルート）、バスキエ（ヴィオラ）がとても有名です。僕もラスキンのハープは好きなのですが、今は亡きフランスの巨匠ランバルのフルートが野太くて、立派に音が出すぎているところがどうも気になってしまふ。だから今回は、この3人の次の世代の奏者たちを選びました。ハープのカンブルランは、ブーレーズが組織したアンサンブル・アンテルコンタンポランの奏者のひとりで、とても現代的ですね。フルートのベルノール、ヴィオラのバスキエも素晴らしい。やっぱりこの曲は、堂々とした感じよりも、古代的で東洋的な「わびさび」にも通ずる響きの演奏がふさわしいと思うのです。



第43回

マスエル・

ブランカフォルト

過ぎ去りし日々の覚書

「La Luna Brilla」

カタルーニャ特有の

「もの悲しさ」漂うピアノ曲

スペインのカタルーニャ州出身の作曲家というと、フェデリコ・モンボウが知られていますが、今回のマスエル・ブランカフォルトは、モンボウより4歳若い作曲家で、19世紀の終わりに生まれ、20世紀を生き抜いた人です。僕はモンボウにも通ずる「センチメント」が好きで、今回は、彼のピアノ曲「Notes D'antany（過ぎ去りし日々の覚書）」の中の「La Luna Brilla（The Moon Shines）」を取り上げました。この「もの悲しさ」は彼らに共通する内省的な感性なのか、それともカタルーニャという土地柄からくるものなのか。

有名な出来事ですが、この地方出身のパブロ・カザルスが国連でカタルーニャ民謡の「鳥の歌」をチェロで弾いたことがあります。それは、途中、「ピース、ピース」と鳥が鳴くように演奏されるのですが、とても切なく悲しいメロディが忘れられません。

バルセロナ・オリンピックの際に、作曲と指揮を頼まれ、カタルーニャの州都であるバルセロナに通っていた時期がありました。彼らにとつて、とても重要な式典の一部を、極東の僕に頼むということに驚きました。カタルーニャは、スペインの一地方ですが、じつは独立した国とっていいくらいに、文化や風習、言葉や音楽も違います。そのうえ、20世紀の後半までスペインはフランコによる軍事独裁政権だったので、地方色を出すことが禁止されていて、名前もスペイン風に変えさせられていたし、民謡も禁止されていたそうです。だから彼らは、マドリッド中心のスペイン人たちは違うんだという意識や、独自性を打ち出すことを、とても大切にしています。スペインというと、陽気なラテン的なものを誰もがイメージするでしょう。ところが、バルセロナはそれほど明るくない。マドリッドはマツチョな文化です。血と力の文化。大航海時代には南米まで植民地を求めて行ったぐらいですから、それに比べて、カタルーニャの人たちは、僕から見ると、女性的というか、美を愛する人たちという感じがします。アートとファッションと観光の力をとても大切にしています。

ブランカフォルトの人生も音楽も、カタルーニャの歴史と切り離して語ることができないものです。若いころバリーに音楽修業に出て、フォーレやドビュッシー、ラヴェルらのハーモニを学んでいることもあって、とても洗練された雰囲気があり魅了されています。

第44回

ロベルト・シューマン ピアノ三重奏曲 第3番 ト短調

メランコリー深まる
晩年の秀作

シューマンは個人的に大好きな作曲家で、この連載では3度めの登場。だけど、全貌をひとりで語ることが大変難しい人だと思っています。彼自身がピアノリストを目指していたというところもあり、ピアノ曲をたくさん残しています。ピアノリストとしては挫折してしまうのですが、短く、ある意味で悲劇的な人生のうちに、交響曲や歌曲など膨大な曲を書きました。彼は自殺未遂のあと、療養所で46歳の人生を閉じました。

この「ピアノ三重奏曲 第3番 ト短調」は、有名な「ピアノ三重奏曲 第1番 ニ短調」や「ピアノ五重奏曲 変ホ長調」と比べたら、それほど知られていないかもしれませんが。この曲が書かれたのは、1851年。シューマンの人生の終わりに近づいているせいもあるのか、メランコリーも若いころよりさらに深まって、とても深い。彼の弟子であるブラームスにも、メランコリックな曲はたくさんありますが、どちらかというと哲学的で内省的。シューマンも単純なメランコリーではありませんが、ブラームスに比べて、もっと魔力をもっているというか、ある面では過剰な情熱の裏返しみたいなものがあり、そのせいで惹かれるのかもしれない。まさに、「ロマン派」の真骨頂ですね。

僕は若いときには、よくシューマンのピアノ曲を弾いていました。楽譜屋で5冊ぐらい譜面を買ってきて、気の赴くままに弾いていました。練習といった感じではなくて、まったく自分の愉しみのためでした。誰にでも覚えがあると思いますが、「青春」という感じですね。シューマンはかなり繊細な人だったし、でも志の高い、まさに「青春」を象徴する音楽家だったと思います。その彼が、晩年になるにつれ、すごく淡くなっていく。それもまた、魅力なんですね。

あと、もうひとつ言っておきたいのは、僕にとってはシューマンとフォーレ、それも晩年になって淡みを増した時期のフォーレは、とても似ていると思うということ。最もロマン派らしいシューマンと、パリの上品な作曲家の代表でもあるフォーレが似ているなんて、僕以外には誰も言っていないかもしれません。フォーレはじつは熱狂的なワグナー好きでしたから、上品な顔の下には、魔力のようなパッションやロマンが隠されているのかもしれないですね。



第45回

ドビュッシー

前奏曲集 第2巻 第5曲

「ヒースの茂る荒野」

驚くほどの「自由度」で
未知の領域を拓く

今月は、ドビュッシーの『前奏曲集 第2巻』を取り上げます。ドビュッシーのプレリユー
ドには、一般的には「亜麻色の髪の乙女」など、第1巻に親しみやすい曲が多く、第2巻
はどちらかというと淡い印象です。しかし僕は、第2巻も大好きで、この5曲目の「ヒ
ースの茂る荒野」も、10代のころからよく弾いていました。

以前、この連載で、ドビュッシーの最晩年の「ソナタ」を取り上げました。フルートとヴィ
オラとハープのための曲でしたが、このような曲は、さまざまな楽器のために書くわけ
ですから、即興的に作るというわけにはいきません。よくそれらの楽器の組み合わせ、音色
の可能性などを考え、想像しながら書くことになります。それはとても内省的な作業と
いつてもいいのですが、自由な楽想の羽ばたきを抑えることにもなりがちです。しかし、
晩年のドビュッシーはそれにも関わらず、とても自由度の高い音楽を生み出しました。

もともとドビュッシーは、10歳でパリ音楽院に入學し、当初ピアニストを目指したように、
とてもピアノが上手でした。ですから、そのピアノ曲は、より即興的で自由な楽想に溢れ
ていると、僕には聴こえます。『前奏曲集 第2巻』は、ただ淡いだけではなく、驚くほど
の「音楽の自由度」に到達しているのではないのでしょうか。和声、リズム、楽想など、そ
れまでの音楽の形にとらわれずに、未知の領域を切り拓いています。

ドビュッシーというと、一般的には印象派の絵などのように、霞のかかった甘いムードの
音楽と思われるがちですが、じつは「20世紀音楽の父」といっていいくらい、確実に戦後の
音楽を準備した作曲家だと思っています。

この演奏は、僕がピアニストの中で一番好きなアルトゥーロ・ベネデッティ・ミケラン
ジェリによるものです。彼は何を弾いても宝石のように綺麗。いつも冷静かつ正確な演奏
で、ほんとうに人間わざと思えないほど美しい。

記憶が定かではないのですが、小学生のころミケランジェリの演奏会を聴きに行ったよ
うな覚えがあります。彼は演奏旅行に出るときに、必ず自分のピアノを持ち込み、調律師
も連れて行くという有名なエピソードの持ち主でした。「すごいね」なんて言っていた記憶
があります。でも、妄想かもしれません（笑）。

第46回

フォーレ

ヴァイオリン・ソナタ

第1番 イ長調 Op. 13

みずみずしさ溢れる

若き日の名曲

正直に言うと、若いころは、フォーレの音楽はあまり好きではありませんでした。もちろん有名な「レクイエム」や「シリエヌ」などは知っていましたし、ピアノ連弾用の「ドリ」も、和音のつながりや、瞬間的に転調して、またすぐに戻るところなどが、すごく洗練された音楽だなと感じていました。でもじつは、あまり聴いていませんでした。上流階級のサロンで流れるような甘ったるい音楽という先入観が強かったのと、フォーレが長いこと、パリ音楽院の学長だったので、權威の象徴だと思っていたんですね。でも彼は長い間、先生として優秀な弟子を育てました。彼がいなければ、ラヴェルも誕生していなかったでしょう。

そんな印象でしたが、3年前に中咽頭がんを患い、その治療が終わり、療養のためにハワイに1カ月ほど滞在しました。40年ぶりぐらいの何もしない休息、いつも聴いていない音楽を聴いて過ごそうと、まとめてフォーレを聴きました。まあ、本来は、ハワイとフォーレは全く合わないのですが……。波の音を聴きながら、フォーレを聴く。そんなふうに聴いていたら、だんだん好きになってきました。そのとき、すごく心に残ったのが、この「ヴァイオリン・ソナタ 第1番」でした。若いころに書かれた作品で、みずみずしさに溢れています。僕はこの曲を聴いたとき、ブルーストの小説『失われた時を求めて』を思い出しました。この曲がブルーストの小説の世界に一番フィットしている音楽に思えたんです。調べてみると、実際にふたりは交友があつて、ブルーストは自宅にフォーレを招待し、室内楽の演奏会をしたらしい。まさにサロンの空気が一番よく出ている曲だと思っています。

それと面白いのは、若きドビュッシーが現れたときに、フォーレがすごく嫉妬したという話。ドビュッシーが30代頭で書いた弦楽四重奏曲を聴いて、「こんなにすごいものを書かれたんじや、もう私は一生、弦楽四重奏曲は書かない」と言つて、何十年も書かなかった。ところが最晩年にラヴェルを含む弟子たちが懇願し、その熱意に打たれたのか、フォーレは弦楽四重奏曲を書くんです。淡い、悪くない曲です。79歳でフォーレが亡くなったときは、何千人も集まる盛大な国葬が行われた。そこでは自作の「レクイエム」が流れたのですから、ほんとうに幸せな人だったと思います。

第47回

モーツァルト

ピアノ協奏曲 第20番

ニ短調 K. 466

第2楽章 ロマンズ

モーツァルトの「天使性」を
極めた「ロマンズ」

このモーツァルトの「ピアノ協奏曲 第20番」は、大変有名な曲なので、皆さんも耳にしたことがあると思います。3つの楽章から構成されている中から、今回は、「第2楽章 ロマンズ」を取り上げてみました。

作曲家のハイドンが言ったと思うのですが、「モーツァルトは、音楽の天使」が書いたよう」なのです。まさに、「天上の音楽」「天国の音楽」です。

ところがモーツァルトには、もうひとつ、正反對の顔が同居しています。オペラ『ドン・ジョヴァンニ』の序曲や、晩年の「レクイエム」には、悪魔が書いたとしか思えない、おどろおどろしい音楽があります。

つまり、モーツァルトの中には、天使と悪魔が棲んでいて、ときどき悪魔が顔を出す。この「ピアノ協奏曲 第20番」の第1楽章と第3楽章はまるで死神がこっちに來いと呼んでいるかのような音楽ですが、第2楽章は彼が数多書いた「天使の音楽」の中でも極めつきといえるものだと思います。その「天使性」は、これ以上シンブルにできないところまで音を削ぎ落としたところからきています。シンブルなのに何度聴いても飽きない。もちろんモーツァルト自身は、知的な操作をして作曲しているのだけれど、その結果として生まれた音楽は、知的対象であることを超えてしまっている。分析とか批判とか、そういう対象ではなくなくなってしまった。

この曲は子どものころから大好きで、ずっと聴いてきました。レッスンで弾かされたこともありますが、モーツァルトの曲を弾くのはじつはあまり好きではありませんでした。シンブル過ぎて、弾き手にとってこんなに難しい音楽はないのです。「モーツァルト弾き」と呼ばれるピアニストが何人かいますが、音楽がまるでダイヤモンドなので、ゴミひとつないように弾かなくてはいいけない。僕には無理ですね。

しかし、今回取り上げたルドルフ・ゼルキンのピアノと、クラウドイオ・アバドの指揮によるロンドン交響楽団の演奏は素晴らしいです。ゼルキンは几帳面で清潔な演奏に特徴がありますが、モーツァルトの音楽が、演奏家の個性とか解釈を許さないものだということをおわかったうえで弾いている。それでいて、じつに優雅なのです。

第48回

ドメニコ・

スカルラッティ

ソナタ ロ短調 K. 87

老境のホロヴィッツによる
豆腐を切るような演奏

スカルラッティは、バッハやヘンデルと同時代の17世紀後半から18世紀に活躍した作曲家です。親子ともに有名ですが、最終回は、息子のドメニコ・スカルラッティの「ソナタ」を取り上げることにしました。

当時のヨーロッパの中心地はイタリアで、スカルラッティはそのど真ん中で活躍していた人です。一方のバッハはゲルマン圏に住んでいたもので、イタリアに比べれば田舎で、若いころはずいぶんイタリアの流行のスタイルを学んでもいました。しかしバッハが古い対位法の音楽にこだわり続けたのに対し、大きな音楽の流れは「バロック」から「古典派」へ移ろうとしていた時期で、スカルラッティは新しいスタイルでの作曲に取り組んでいました。彼はたぐさんの鍵盤音楽を手がけたので、自分の演奏リストに取り上げるピアノリストも多くいます。僕自身はじつはスカルラッティがあまり好きではなかったし、この曲を得意とするホロヴィッツも取り立てて好きではありませんでした。80年代にホロヴィッツが来日し、NHKホールで演奏会がありました。これが大変な騒ぎでチケットも5万円くらいしたのですが、僕もこのコンサートを聴きに行っただけです。ホロヴィッツは最初にベートーヴェンの後期のソナタを弾いたのですが、これが毎小節ミスタッチをするような演奏で、僕はあきれて第1楽章の途中で席を立って出てしまいました。ホールの前に出ると、たぐさんの報道陣が来ていて、「坂本さん、どうしたんですか?」と聞くので、「もう聴いてられない!」と捨てゼリフを残して去りました。後日、演奏会の評を読むと「残念だった」という感想は僕ともうひとりだけで、みんなが絶賛していたのにも呆れてしまった。

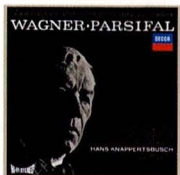
ですが、数年前に偶然、YouTubeで彼が最晩年にこの曲を弾いているのを見て、衝撃を受けました。もちろんミスタッチもないし、真に老境の域に達していなければ弾けない演奏でした。以前、細野晴臣さんが、「キューバの『プエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』の老ベージストの演奏がすごい」と話してくれたことがあり、細野さんはそれを「豆腐を切るようにベースを弾く」と表現しました。ホロヴィッツの演奏はまさにその表現どおり。僕も天が時間を与えてくれて、80歳ぐらいまで生きたら、豆腐を切るように弾けるようになるかしら。



『デビュー・リサイタル (ショパン・ブラームス・リスト・ラヴェル・プロコフィエフ) [SHM-CD]』
マルタ・アルゲリッチ (ピアノ)
(ユニバーサル ミュージック UCCG-6129)
右ページと同じドイツ・グラモフォンのデビュー盤より。ラヴェルの「水の戯れ」同様、この「舟歌」でも、アルゲリッチの流麗なテクニックと、情感たっぷりのみずみずしい演奏を聴くことができる。



『ブーランク：ピアノと木管のための作品集 [SHM-CD]』
パスカル・ロジェ (ピアノ)、バトリック・ガロワ (フルート)、モーリス・ブルグ (オーボエ) ほか
(ユニバーサル ミュージック UCCD-51081)
ブーランクの室内楽作品の中でも最もポピュラーな作品のひとつである「ピアノと木管のための六重奏曲」をはじめ、「クラリネット・ソナタ」や「フルート・ソナタ」など、彼の木管楽器へのこだわりが強く表れたアルバム。



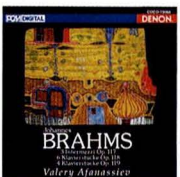
『ワーグナー：舞台神聖祝典劇「パルジファル」』
クナッパertzプッシュ指揮 バイロイト祝祭管弦楽団
(タワーレコード PROC-1670/3)
戦後のバイロイト音楽祭を支えた指揮者といわれるクナッパertzプッシュによる、1962年の同音楽祭での伝説的な録音。荘厳かつ神秘的で崇高な演奏は、50年を経た今も、『パルジファル』演奏の決定盤として多くのワーグナーファンの心を捉え続けている。



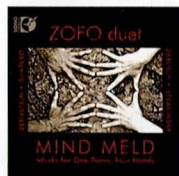
『フランク & ラヴェル：ヴァイオリン・ソナタ』
ジャン＝ジャック・カントロフ (ヴァイオリン)
ジャック・ルヴィエ (ピアノ)
(コロムビアミュージックエンタテインメント COCO-73126)
フランクとラヴェルの「ヴァイオリン・ソナタ」をカップリングした貴重なアルバム。カントロフとルヴィエ、フランスのヴァイオリニストとピアニストのエスプリに満ちた繊細なデュオを堪能できる。



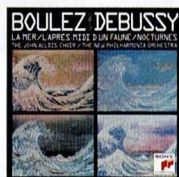
『ブルックナー：交響曲 第5番 [初回限定盤] [UHQCD]』
(ユニバーサル ミュージック UCCG-90666)
ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
カラヤン & ベルリン・フィルの全盛期時代の1976年に録音された名演奏を、UHQCD (Ultimate High Quality CD) という高音質CDで甦らせたアルバム。終楽章に壮大なフーガを含む幻想的かつ神秘的な楽想が、雄大なスケールで繰り広げられる。



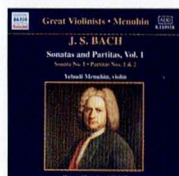
『ブラームス：後期ピアノ作品集』
ヴァレリー・アフナシエフ (ピアノ)
(コロムビアミュージック COCO-73066)
ブラームス晩年のピアノの小品ばかりを集めた珠玉の名盤。アフナシエフが、非常にスローなテンポで情感たっぷりに、一音一音、かみしめるような深みのある演奏を聴かせている。



『MIND MELD - Works for One Piano, Four Hands』
ゾフォ (ピアノ)
(輸入盤 Sono Luminus DSL-92151)
2009年からピアノ・デュオとして活躍してきたゾフォによる連弾曲集。バーンスタインの「キャンディード序曲」ほか、ドビュッシー、シェイベロウなど、連弾曲の新たなレパートリーを開拓し注目を浴びている。



『ドビュッシー：管弦楽曲集』
ピエール・ブーレーズ指揮 ニュー・フィルハーモニア管弦楽団
(ソニーミュージック SICC-1606)
ブーレーズによるドビュッシーの録音の集大成ともいえるべきアルバム。1966年～68年にかけてのニュー・フィルハーモニア管弦楽団、クリーヴランド管弦楽団との共演を取っている。壮年期のブーレーズならではの刺激的かつキレのよさが光る。



『J.S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ BWV1001、1002、1004 (1934-1935)』
ユーティ・メニューイン (ヴァイオリン)
(輸入盤 Naxos Historical 8.110918)
メニューインは、「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」を3回録音している。この盤は、本文で紹介した1934年の録音を収録した数少ないアルバム。18歳の若きメニューインのみずみずしい演奏を聴くことができる。



『Beethoven : Symphonies No. 3, 5, 6, 7, 8』
フルトヴェングラー指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(輸入盤 TAHRA FURT 2002-2004)
ベートーヴェンの交響曲の中でも代表的な「第3番 英雄」「第5番 運命」「第6番 田園」などを、フルトヴェングラーとベルリン・フィルという黄金のパートナーによる演奏で堪能できる。TAHRAはヘルマン・シェルヘンの娘が経営に携わっていたフランスのヒストリカル・レーベル。



『デビュー・リサイタル (ショパン・ブラームス・リスト・ラヴェル・プロコフィエフ) [SHM-CD]』
マルタ・アルゲリッチ (ピアノ)
(ユニバーサル ミュージック UCCG-6129)
1965年のショパン国際ピアノ・コンクールで優勝する以前、1961年にドイツ・グラモフォンから発売された衝撃のデビューアルバム。まだ20歳にも満たないアルゲリッチの恐るべきテクニックと、情熱的で自由奔放な演奏に魅了される。



『シューベルト：ピアノ・ソナタ全集』
アンドラージュ・シフ (ピアノ)
(輸入盤 デッカ 4783018)
廃盤で入手困難となっていたシフの「シューベルト：ピアノ・ソナタ全集」。こちらは同じデッカから再発売されたもの。「即興曲全集」をカップリング。オリジナルの7枚組はiTunesで購入可能。



『ブランカフォルト：ピアノ作品全集 1』
ミケル・ビリャルバ (ピアノ)

(輸入盤 Naxos 8.557332)

ブランカフォルトの初期のピアノ作品を集めた全集の第1巻。「Peces De Joventut (青春の小品)」 「Cançons De Muntanya (山の歌)」 など全37曲を収録。



『シューマン：ピアノ三重奏曲集／幻想小曲集』

ボロディン・トリオ

(輸入盤 Chandos Records Ltd CHAN8832)

「ピアノ三重奏曲 第1番」「第2番」「第3番」と「幻想小曲集」をカップリングした2枚組のアルバム。CDは現在入手困難だが、iTunesなどでデジタル音源の入手が可能。



『ドビュッシー：前奏曲集第2巻 [SHM-CD]』

アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ (ピアノ)

(ユニバーサル ミュージック UCCG-52114)

ミケランジェリの完璧なまでの技巧が際立つ『前奏曲 第2巻』は、1988年にドイツ・グラモフォンにより録音された。2019年1月24日、ユニバーサル ミュージックからCDが再発売される予定。



『フォーレ：ヴァイオリン・ソナタ第1番、第2番』

カン・ドンスク (ヴァイオリン) バスカル・ドウヴァイオン (ピアノ)

(輸入盤 Naxos 8.550906)

「いろんな演奏を聴き比べた結果、これが一番よかった」と坂本さんが語るの、韓国人ヴァイオリニスト、カン・ドンスクと、フランス人ピアニスト、バスカル・ドウヴァイオンによる一枚。



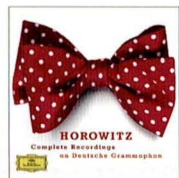
『モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番・第21番 [SHM-CD]』

ルドルフ・ゼルキン (ピアノ) クラウドディオ・アバド指揮

ロンドン交響楽団

(ユニバーサル ミュージック UCCG-51064)

1982年に録音されたこの盤では、80歳近いゼルキンの風格と気品溢れる演奏を聴くことができる。20番と12番をカップリングした同ジャケットの輸入盤もある。

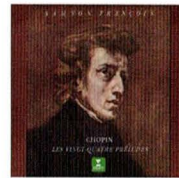


『Horowitz Complete Recordings on Deutsche Grammophon』

ウラディミール・ホロヴィッツ (ピアノ)

(輸入盤 ドイツ・グラモフォン 4778827)

ホロヴィッツがドイツ・グラモフォンに残した晩年の録音をボックスセットにしたもの。坂本さんがYouTubeで聴いた演奏とは異なるが、こちらでも味わい深い演奏を聴かせている。



『ショパン：24の前奏曲、即興曲集』

サンソン・フランソワ (ピアノ)

(ワーナーミュージック・ジャパン WPCS-23290)

アークの強い個性的な演奏で知られるフランス人ピアニスト、サンソン・フランソワが、ひと際力強く情熱的で重厚なショパンを聴かせている。ショパン解釈の原点のひとつともいわれる名盤。

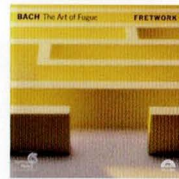


『ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第32番 | シューマン：交響的練習曲 他』

イーヴォ・ボゴレリッチ (ピアノ)

(ユニバーサル ミュージック UCCG-4556)

1980年のショパン国際ピアノ・コンクールでの本選落選に対し、「彼こそ天才よ！」とアルゲリッチが抗議し審査員を辞任したことでセンセーションを巻き起こした翌年、81年の録音。ベートーヴェン最後のソナタの衝撃的な演奏のほか、ショパンの「練習曲」「夜想曲」もカップリング。

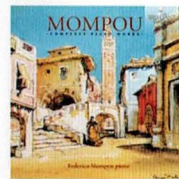


『J.S. バッハ：フーガの技法』

フレットワーク

(輸入盤 harmonia mundi HMX2907296)

英国のスーパー・ヴィオール合奏団フレットワークが、このアルバムのために特製のヴィオールを作り録音に挑んだという大作。ヴィオールの豊かで美しい音色を堪能できる。ハルモニア・ムンディは1958年設立、古楽から現代音楽まで、人気奏者による優れた録音で人気のレーベル。

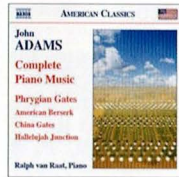


『モンボウ：ピアノ作品全集 / Mompou: Complete Piano Works』

(輸入盤 Brilliant Classics BRL6515)

フェデリコ・モンボウ (ピアノ)

「スペインのサティ」とも呼ばれていたフェデリコ・モンボウが、80歳の年に自作自演で録音したピアノ作品集。カタルーニャ特有の内省的で、静謐かつ穏やかな美しさを湛えたメロディが特徴。一音一音が心に染みわたるようだ。

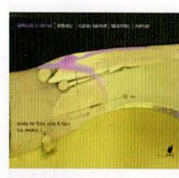


『ジョン・アダムズ：ピアノ作品全集』

ラルフ・ヴァン・ラート (ピアノ)

(輸入盤 Naxos 8.559285)

アダムズの初期の作品である「フリギアの門」「中国の門」から、2001年の「アメリカの狂乱」まで、これまでのピアノ作品を網羅。最後の「ハレルヤ・ジャンクション」では、「ハレルヤ」のモチーフを織り込むなど、アダムズの持ち味であるポップな一面もうかがえる。



『Debussy's Corner: Works for Flute, Viola & Harp』

Trio Medicis

(輸入盤 Cypres Records CYP1637)

『ドビュッシーの領分』と名付けられた、フルート、ヴィオラ、ハープによる室内楽の作品集。リチャード・ロドニー・ベネットの「シュリンクスによるソナタ」や、武満徹の「そして、それが風であることを知った」など、ドビュッシー晩年の3つのソナタに着想を得た楽曲を収録。